

第57回総会学術大会派遣報告書

- 人間が1番の情報源である。 人に会い、人から情報を引き出そう -



金沢大学大学院医学系研究科
田中利恵

学会が私を変えた

「行き詰まったら視点を変えて再挑戦」がモットーの私にとって学会とは、「視野を広げる魅力的な場」にあたる。人との出会い、自分とは違う考え方の出会い、そして新しい技術との出会い。同世代に囲まれた学生生活を送っているため、さまざまな人との出会いは特に刺激的である。

初めて参加した学会は、昨年横浜で開催された第56回総会学術大会だった。それは、解答付きの問題集や教科書が与えられていたこれまでの学生生活とは違う世界との出会いだった。「人がやっていないこと、つまり答えが用意されていない問題にぶつかっていくことはやりがいがあるだろうなあ。私も挑戦してこの学会で発表したい」という感想を持って帰路についた。この思いが今の私の原点となっている。

昨年の秋季学術大会では、シカゴ大学の土井先生やDr.Metzと食事をご一緒するという貴重な体験をした。「プレゼンテーション中、ポインタを持つ右手が震えます」と土井先生に相談すると、「それなら左手で支えて両手で指すといいですよ。そのうち止まりますから」というアドバイスをいただいた。土井先生でも

そんな時があったのかなあ、と気持ちが軽くなったことは記憶に新しい。また、Dr.Metzに自己紹介するチャンスをいただいた。しかし、思うように英語が話せず悔しい思いをした。これがきっかけで、「今年の秋までに英会話をマスターしてRSNAに参加するぞ」と決心した。今年の4月から学生交流会館へと引越し、かつ英会話スクールのお世話になっている。人との出会いが与える影響の大きさを感じた。

今回の総会学術大会では、昨年抱いた夢が叶い発表者として参加できた。昨年は規模の大きさに圧倒されて浮き足立ち、演題内容が難しくついていけなくなると近くの喫茶店に逃げ込みお茶をしてしまうほどだった。今回はどうだったかという.....

発表者として参加した学会はここが違った

対岸から見た景色

今まで自分が居た場所を対岸から見るような感じがした。それによって初めて気がつくことは多々あった。うなずきながら発表を聞いてくれる方が1人でもいてくれるとありがたいものだ。そして、自分が聞き手になったときは発表内容だけでなく発表の仕方、例えば、

- 1) 分かりやすいスライドのデザインはどういうものだろう?(文字の大きさ, 文字の量, 図の配置)
- 2) 人を惹きつける話し方とは?(ノンバーバルコミュニケーション, ポインタの活用)

に自然に目がいった。また、人前で発表することの大変さを以下に記す事件で痛感した。

絶体絶命大ピンチ!

今回はパソコンを使っての発表を当初から予定していた。福井に就職した元研究室メンバーにノートパソコンを借りる約束をしていた。プレゼンテーションファイルの大きさはフロッピーディスクサイズ。当日フロッピーを媒体にパソコンにデータを移せばいいだろう、と思っていた。前日の深夜にその彼に連絡をとるとフロッピーディスクドライブが付いていないことが



Photo. 1 神戸.



Photo. 2 4月5日 第4会場(501会議室)にて。

判明し、それから大慌てだった。なぜなら前日に新居に引越しをしたばかりの私はそのときネットワークから孤立していたからだ。金沢出発は午前の早い時間帯なのでもう時間がない。予備のスライドは作成してあるが、変更箇所がいくつもあるからあまり使いたくない。結局、昨日引越しのあいさつをしたばかりのお隣さんを深夜にたたき起こし、ネットワークを使わせてもらいデータを無事送信できた。朝になって冷静に考えてみると、フロッピーディスクドライブのついていないノートパソコンを同行する研究室メンバーから借りればよかったことに気が付いた。相当パニックになっていたようだ。話はまだ続く。ファイルサイズが大きかったため圧縮ではなく二つに分割して送信したのだ。発表30分前にスライドセンターでしたことは最後の確認ではなく、二つのファイルのつなぎ作業だった。「トラブルは買ってでも引き受ける。それが自分を育てる」ということを過去に何かの本で読んだことがあるが、確かにこのアクシデントで少したくましくなった(ような気がする)。

自分の発表は必死でした

今回の演題は「横隔膜動態解析の可能な新しい胸部スクリーニングX線検査法」だった。この研究は動画対応フラットパネルディテクタを用いた新しい撮影法の開発を目指して始めたものだ。発表をしてみて、臨床で働いている方からの意見・質問は臨床経験がない私にとってどれも素敵なプレゼントとなった(と今だからいえる)。なにせ発表前ば「お願いだからつっこまないで!」と騒いでいたのだから、原稿にかじりついて発表するのは格好悪いからスライドと聴講者だけを見て発表したい。そう思っていたがそれは前半しかもたなかった。また、私自身が勉強不足だったためせっかくの質問に対して的がはずれた返答をしてしまった。いざ本番を迎えると失敗だ。しかし、失敗を恐れては何もできないのでこれはこれでよしとする。

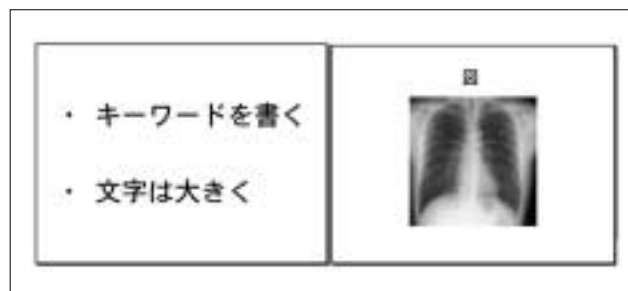


Fig. 聞き手にやさしいスライド構成。

次回、研究結果を発表する際には、この経験が生かせればよいと思う。大学院に進学した現在も引き続き「呼吸性動態解析」について研究している。肺紋理の呼吸性動態をオプティカルフローにより解析することで、病気を早期の段階でスクリーニングできないかと研究を進めている。

この学会で得たもの

<その1>これは真似をしたい!おすすめの「発表の仕方」

経験豊富な先生方の発表をたくさん聞くことができました。そして、自分が目標とする発表スタイルができた。これが今回の1番の収穫だったと考えている。簡単に紹介する。

文章はシンプルに。

文章というよりテーマに近い。スライドに書いてないことは口述する(Fig.)。このスライド構成にすれば図を見ながら話を聞くことができる。

途中、今は何についての話だった?と思ったときはテーマを確認できるので、聞き手にやさしいスライドだと思う。

マイクは左手、ポインタは右手。

顔の向き スライド: 講聴者=5:5

聴講者に見せたいものを自分も見る。それ以外は聴講者の方をどーんとかまえて見る。

すると聴講者は安心して聞くことができる。秋季大会ではこのスタイルに挑戦したいと思う。

<その2>人間が1番の情報源だ

機器展示会場に行くと、1階入口付近にあったCT・MRI搭載検診車に目を惹かれた。興味津々で中を覗いていると担当の方が丁寧に説明して下さった。話によると病院に設置してあるCT・MRI装置の入れ替え時期の中継ぎとして、また検査数の多いときのヘルプとして全国規模でレンタルを行っているそう。放射線技師が撮影からメンテナンスまで引き受けているそうで、いろいろなところに行くことができる楽しい仕事だと思う反面、技師の責任は大きくなりやりのあ



Photo. 3 機器展示会場付近にて。



Photo. 4 ゆかいな仲間たち。

る仕事だとも思った。検診車台数も放射線技師の人数も増やす予定があるそうで、今よりも手軽にCT・MRI検査が受けられるようになる日も遠くはないのではないかと感じた。幸運にも社長さんとお話する機会をいただいた。そして、社長さん自身がこういったシステムの必要性を強く感じ立ち上げたビジネスであることが分かった。「必要とされることに答える」が研究でも仕事でも基本だと再認識できた。

次の会場への移動途中に以前お世話になった先生にお会いすることができた。その先生からおすすめの演題を教えてください、スケジュールを変更して聞きに行った。最後まで立ち見するくらいおもしろい演題だった。人に疑問をぶつけて関心を得るといった発表スタイルは真似をしたいものだ。この演題に出会えたのは移動途中に先生に教えてもらえたからこそ。「本当に価値のある、血の通った情報は人間にある。人に会い、人から情報を引き出そう！」以前読んだ、新社会人向けの本の1ページにあったフレーズを思い出すような体験だった。

仲間と参加した学会は一味違う

昨年の横浜で開催された学会は友人と2人で参加した。今年は研究室メンバー7名で参加した。日中は各自が自分のスケジュールで動き、たまたま重なったときや空き時間に感想を述べ合い情報交換をした。特に前回と「一味違う」と感じたのはafter 5:00pmだった。おいしいものを食べながら研究や将来のことについての意見交換で盛り上がった。こうやってみんなで成長していくのだからなあと思った。しかし、帰りの財布は薄くそして軽くなった。ここで一句、「飲み会代、後の生活考えて」

この場を借りて、今回一緒に参加した仲間のことを紹介する。金沢大学の真田研究室には大学院生2名と学部生5名の計7名の学生がいる。研究は「動画対応

フラットパネルディテクタを用いた新しい撮影法の開発」がメインとなっている。胸部、手関節、顎関節、膝関節といった部位で研究を進めている。画像処理をするうえで何か特別なことをしようとする一般的なグラフィックスソフトでは限度がある。そこで、プログラミングの勉強も進めている。全員初学者なので些細なことでも行き詰まり、研究手段であるはずのプログラミングに振り回されることもよくある。しかし、ポジショニングや撮影条件設定といった「画像を作る」という、放射線技師の基本であり持ち味を生かせるような研究をしようと心掛けている。

効率のよい学会参加の仕方

学会に参加する前に、学会開催中の自分のスケジュールを立てた。予稿集とにらめっこしてずいぶん苦労して時間と演題名と場所をA4サイズの紙にまとめた。このおかげで当日「どちらの演題を見ようか？」と悩むことなく分単位で移動することができた。

機器展示ではフラットパネルディテクタを中心にみる、ということ以外は特に計画を立てていなかった。それが失敗の元だった。1日目は「そういえばフラットパネルを作っているのはどこどこだった？」と横の友人と相談しながらまわった。順路が複雑だったせいもあって目的ブースに行くのが大変だった。そこでその日の夜に、持ち帰った出展一覧に目的ブースと最短経路を赤ペンで書き込んだ。2日目は時間前から並んで、最短経路を通してスムーズにまわられた。名付けて「出展一覧、最短経路書き込み法」。限られた時間で目的の展示を見るにはこの方法がおすすめだ。

大会長特別講演(迷子になって少し遅れました.....)

- ・「ゆとり」を持たないと「考える」時間がなくなる。
- ・業務×2では疲れるだけ。頭をリラックスさせてあげよう！



Photo. 5 モザイクにて(著者:左).

・4年制になり「研究室」ができた。ここでお茶をしながら自由な発想をしよう！

この三つがとても印象に残った。これまでの私は、ぎりぎりいっぱいスケジュールを立てそれをこなすことで安心していた。そんな「考える」時間のない生活は味気のないものだし、余裕がなければ新しい発想もわいてこないだろう。今は研究室でお茶をしながら「考える」時間を大切にしている。(秋季大会は名古屋...名古屋といえば味噌カツ、味噌煮込み、ひつまぶし)

CyberRad

最初に行ったのが胸部サブトラクションCAD体験ブースだった。まだ空いている時間帯だったので30分かけてCADを体験できたし、担当の方が丁寧に説明してくださった。朝一の体験コーナーはおいしい。慣れるにつれて正解が増え、読影にかかる時間も短くなった。また、CADの情報なしでは見つけられなかった病巣もCADの情報ありだと見つけられた。CADの

有用性を身をもって体験できた。「百聞は一見に如かず」とはよくいったものだが、自分の目で確かめただけにそのインパクトは大きかった。

別のブースではポートアイランドに光ファイバを引くにあたっての裏話も聞くことができた。かなり大変だったようだ。いつも利用しているネットワークはもともとそこにあるものではなく、人が引くものなのだと実感した。

一般演題

大会中はフラットパネルディテクタ関係の演題をすべて聞く予定だった。「動画像から機能的データを抽出し、スクリーニング検査に付加的診断情報を与えられないか？」という方針で研究を進めているので、フラットパネルディテクタを用いた撮影での被曝線量について気になるところだ。去年は遅れて行ったために会場に入ることすらできなかったのが、この失敗を生かして前の会場からダッシュした。しかし、入ることはできたが、立ち見だった。移動経路の最短コースまで把握しておく完璧だったかもしれない。次回はもっと広い会場が割り当てられればいいなあと思う。

ランチョンセミナーは「胸部の画像解剖」に参加した。まず、胸部単純X線画像とCT画像を対応付けて勉強を進めていくというスタイルは取り入れたいと思った。これに限らず発表を聞くにあたって感じたことがある。テンポの速いプレゼンテーションですべてを理解するのは無理だが、自分の勉強不足であるところに気付く。これを帰ってから調べれば自分のものになる。理解不足を認識することも大きな収穫だと思った。

今回も貴重な体験ができました

最後になりましたが、今回私を学生派遣という形で学術大会に参加させてくださった小寺吉衛大会長をはじめ、学会事務局の皆様へ深く感謝いたします。成功も失敗もドタバタ劇もあったけど、今回の経験は次に生かしたい。そのために「考え」そして「実行」していこうと思います。今後ともよろしく願いいたします。